慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	都築忠七著 エリーナー・マルクスの生涯（一八五五-一八九八年）：ひとりの社会主義者の悲劇
Sub Title	Chushichi Tsuzuki, The life of Eleanor Marx, 1855-1898, a socialist tragedy, 1967 (Oxford)
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1968
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.61, No.9 (1968. 9) ,p.992(64)- 995(67)
JaLC DOI	10.14991/001.19680901-0064
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19680901-0064

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評

都築忠七著『エリーナー・マルクスの生涯（一八五五―一八九八年）――ひとりの社会主義者の悲劇――』

(Chushichi Tsuzuki, The Life of Eleanor Marx, 1855—1898, A Socialist Tragedy, 1967, Clarendon Press, Oxford, xxi+pp. 354)

飯田鼎

マルクス家の悲劇について書いたものは少くないが、その家族のなかでもっとも悲劇的な生涯をたどったエリーナー・マルクスについて、くわしく語っている研究は少い。いまここに紹介を試みる都築氏の労作は、マルクス家の末娘として生まれ、のちにエドワード・エイヴリング（Edward Aveling）と結婚し、イギリスおよびヨーロッパの社会主義・労働運動にきわめて重要な役割を演じた彼女の足跡について、現在利用しうるあらゆる史料を駆使して究明した力作である。この著作からわれわれが学ぶべきもの、あるいはこの研究に関連してふれるべきことは、きわめて多いのであるが、それはあとでふれるとして、この内容について理解することからはじめよう。つぎのような各章から成っている。

一、革命の娘（Daughter of Revolution）
二、愛と政治（Love and Politics）
三、愛と演劇（Love and Drama）
四、エイヴリング博士（Dr. Aveling）
五、社会主義と自由恋愛（Socialism and Free Love）
六、アメリカでの幕合い期（An American Interlude）
七、演劇のミューズを求めて（Wooing the Dramatic Muse）
八、新しいインターナショナルと新組合運動（New International and New Unionism）
九、国際的労働運動と独立労働（International and Independent Labour）
一〇、マルクス主義の遺産（The Marxian Legacy）
一一、窮地の社会民主主義（Social Democracy in Dilemma）
一二、破局（Catastrophe）
一三、死とその余波（Death and Aftermath）

＊　＊　＊

以上の多彩な生涯について簡単にふれることはもちろん不可能であるが、まず予備知識として、マルクス家の家族について知っておく必要がある。マルクス夫妻の間には、一八四四年、パリで生まれた長女ジェニー、ブリュッセルで四六年に次女ラウラ、四七年には長男エドガーの二人が生まれ、四九年には次男グイド、五一年には三女フランチスカ、五五年には四女エリーナーが生まれた。本書の主人公が、まさにマルクス家の第六子であるエリーナーであることはいうまでもない。

エリーナーが生まれた一八五五年当時、マルクスは生活上の危機におちいっており、そうした窮乏のなかで、二人の男の児と三女フランチスカは幼い生命を奪われたのであるが、こうした極度の困窮のなかにあっても、マルクスは勇気を失わなかったし、姉たちにもそうしたように、ホーマーの作品をはじめとしてニーベルンゲンの歌、「ドン・キホーテ」や「アラビアン・ナイト」などを読んできかせるという知的雰囲気にあふれていた。

第一インターナショナルでのマルクスの活動が活発になろうとしていた一八六五年、姉ラウラは、フランスの社会主義者、パウル・ラファルグと結婚、マルクス家には依然として困窮がつきまといながらも、その交際範囲は広まり、大陸からの多くの社会主義者が出入し、娘たちに大きな影響を与えたのであって、パリ・コンミューンに活躍し、のちに有名な研究を残したリサガレー（H. P. O. Lissagaray, Histoire de la Commune de 1871）もそのひとりであった。エリーナーが、両親にゆるされなかったこのリサガレーとの不幸な恋愛を通じて、政治的に次第に目覚めていく様子が、七〇年代におけるフランスおよびドイツ社会主義運動の推移を背景に克明に物語られている（三八頁以下）。マルクスの娘にふさわしく、社会主義運動、被圧迫民族の解放闘争および婦人解放運動に関心をもち、これに専心するようになるのは、六〇年代におけるインターナショナルでのマルクスの活動、七〇年代におけるドイツおよびフランス社会主義運動への積極的な関心および指導そしてアイルランド問題の重大化などを契機とするのであって、この七〇年代までの時期をエリーナーの生涯の第一期とすれば、第二期は、一八八〇年代からはじまるのであって、彼女の演劇活動への積極的な参加、シェークスピアへの心酔、それとともに恋人リサガレーとの訣別、そしてもっとも敬愛する父マルクスの死にあう。このような多事多忙ななかにも充実した生活のなかで、彼女は、自己の運命を決定的に支配することになるところのエドワード・エイヴリング博士にめぐりあったのである。

優秀な化学者および生物学者であり、イギリス社会主義運動にはなばなしい貢献をしながら、金銭の貸借関係に無神経であり、且つ女性関係のモラルに欠けたこのエイヴリングとエリーナーとの結びつきは、世間一般の結婚ではなく、いわば自由恋愛ともいうべきものであった。なぜならすでに彼は結婚しており、この形式を無視した愛情によって、彼らは結びつけられ、同時に夫婦一体となっての社会主義運動への献身となった。社会民主連盟をめぐるハインドマンとの争い、社会主義者同盟の建設によって、マルクス主義の普及に全力をつくす一方、演劇活動への夢を捨てきれず、スカンディナヴィアの文芸、とくにヘンリーク・イプセンの「人形の家」に傾倒し、エイヴリングも劇作家志願とも相まって、舞台俳優として立つことを考える。この間に、夫妻でアメリカに旅行し、労働者階級のための啓蒙的な講演活動を行い、見聞をひろめるのであるが、例によってエイヴリングの金銭的なだらしなさが、アメリカの労働者に

好ましからざる印象をあたえ、それが英本国で知られて、彼らは苦境におちいり、一時的ではあるが社会主義運動からも疎外され、これがますます彼らを演劇活動に駆りたてることとなったのである。この演劇活動と社会主義運動とのエイヴリング夫妻のディレンマ、夫エイヴリングの作品「海辺にて」(By the Sea) の出演にたいするきびしい批評に絶望して死を企てるエリーナーの苦悩、これらにたいする著者の描写は、まことに詳細であり、劇的でさえある。一時は、エイヴリングの劇作家としての活動は、かなり期待のもてる面もあったが、やがて失敗して、本来の社会主義運動に復帰することとなるのである。第三期にあたる一八八〇年代の終りから九〇年代の終りまでの晩年の約一〇年間は、新しく成立した第二インターナショナルと不熟練労働者の組合の勃興を契機とするイギリス社会主義＝労働運動の発展のなかで、エイヴリング夫妻、とくにエリーナーは、もっとも精力的に労働者階級の運動に献身した時期であるとともに、エイヴリングとの夫婦生活の矛盾も、彼の性格と私行上の問題から破綻を来し、ついにエリーナーの自殺という悲劇的な破局に至る最後の時期であり、本書のいわば結論ともいうべき部分である。著者が本書においてもっとも力をいれた部分は、実に第八章以下であり、また国際社会主義運動の研究にたいする貢献という点からみてもまことに重要な事実をわれわれに示唆してくれるもっとも興味ある部分をなしている。すなわち、第二インターナショナルをめぐるマルクス主義と改良主義との闘い、新組合運動と八時間労働制獲得のためのエイヴリング夫妻の活躍、とりわけ、エンゲルスの指導のもとで失業者の組織的運動やガス工組合の運動におけるエリーナーの活動は有名であるが、こうした事実の社会民主連盟、独立労働党およびイギリス労働組合総評議会の相互の勢力関係のなかでの展開について、きわめて実証的に分析している。しかし、もっとも重要なことは、エンゲルスの死後、マルクスの文書上の遺産をめぐるエリーナーを含む近親者たちの感情上の葛藤と、エリーナーの学問的な関心、そしてマルクスの文書上の遺産を娘たちの手から奪い、党の財産としようとするドイツ社会民主党の指導者、ベーベル、カウツキー、ベルンシュタイン等の暗躍など、まことに重要なことが書かれてあり、読者を刮目させずにはおかない。

＊　＊　＊

本書はまことに文学的な香気ゆたかな著作であって、とてもこの短い文章をもってしては、その内容を表現することができない。まず本書は、日本人として、社会主義運動史上、その名を知られながら、その業績が知られることの少なかったマルクスの末娘エリーナーのもっとも包括的なすぐれた伝記であるとともに、それ自体、一九世紀イギリス労働運動史の傑作であることがあげられよう。わたくしはかつて、著者の処女作、H・M・ハインドマンの伝記 (Ch. Tsuzuki, H.M. Hyndman and British Socialism, 1961, Oxford) をよんで大きな感銘をうけたものであったが、いままた本書を読み終って、新たな感慨をおぼえる。そのひとつは、著者のイギリスの文化への深い理解が、文章のすみずみにまで浸透し、とくに、文学的な素養の深さを感じさせることであり、このような流麗な英文を、あたかも自国語の如くに書くことができることを、まことにうらやましく思うものである。つぎにその実証的精神の旺盛なことで、マルクス＝エンゲルスの往復書簡はもとより、これに関係あるあらゆる書簡を縦横に利用し、エリーナーの生涯を浮き彫りにすべく、その背後の複雑な人間関係が、きわめて鮮明に物語られている点、史料的にも高い価値をもっていると考えられる。

しかし、本書が研究としてのもっともすぐれた貢献は、マルクスの文書上の遺産をめぐる諸関係についてであり、筆者もこれによって非常に大きな衝撃をうけた。カウツキーをはじめ、ドイツ社会民主党の指導者の晩年のエンゲルスをめぐる陰謀にもひとしいやり方でのマルクスの遺産獲得の活動は、その動機はともかくわれわれの心に暗い陰を投げかけずにはおかない。また著者は、マルクス家の忠実な家政婦ヘレネ・デムートの息子フレデリック (Henry Frederick Demuth) について、エンゲルスが、マルクスを父親として証言しており、エリーナーが、これによってはげしい衝撃をうけたと書いているが（二六四頁）、筆者もまた衝撃をうけたことも記さずにはいられない。

本書について書きたいことはいろいろあるが、まず本書をよむことが重要であり、この短い書評では到底つくすことはできない。そこで最後に読後感ともいうべきものを書き、著者の御教示をえたい。そのひとつは、本書は、既発表あるいは未発表の史料、なかんずく、夥しい書簡によって渦中の人物像を実に手際よく且つ印象的に描写し、その手法はまことに見事であり、このような伝記文学においては著者は欠くことのできない卓越した手腕をもっていると思う。しかしそれがまた運動そのものの筋道というか、社会主義運動や労働運動の発展についての論理的な解明がやや不充分である面がみられはしないだろうか。

いまひとつ、著者は、マルクスの文書上の遺産の運命について、かなりくわしくふれておられる。だが、ニコラエフスキーによれば、マルクス・エンゲルスの手稿や蔵書の散逸・破棄は、その弟子たち、すなわち、ベーベル、ベルンシュタイン等によって、あるいは娘ラウラによっても行われたとのべ、その例として、エンゲルスのビスマルクにたいするフランスの軍事行動のプランにかんする資料の破棄、またラウラは、マルクス夫妻の書簡のうち、親しい同志を傷けると思われるものを破棄したとのべているが、(1) この点はどうなのであろうか。いま少しくわしくふれていただきたかったと思う。

以上、簡単に、本書の内容について要約し、読後感を書いたが、これは実にすばらしい伝記文学であることを想い、多くの人々におすすめしたい (Oxford Univ. Press, 1967. ¥2430)。

(1) Nicholaevsky, Towards a History of "The Communist League" 1847-1852 (International Review of Social History, Vol. 1-1956-Pt. 2. p. 234)